
Wanderung 7

天下泰平左右衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W a n d e r u n g

【Nコード】

N 6 3 1 6 D

【作者名】

天下泰平左右衛門

【あらすじ】

放浪する七人がいた、何処から来たのかは分からない、ただこの世界の者で無い事は確かだった。七人全員が異世界人のバトルファンタジー、ここに始まる。

序章【木漏れ日】（前書き）

好き勝手に書いてます。話を一度読んで理解したい人にはお勧めしません。戦いで誰かが傷付くのが嫌いな方にはお勧めしません。

序章【木漏れ日】

序章【木漏れ日】

『昼寝』

風が吹いている。

やたらと広い草原の真ん中に、何処へ繋がっているのか皆目見当のつかない一本の道、そしてその道の途中には巨大な木が生えていた。

女性が一人、その木の影で眠っていた。黒髪長髪、端正な顔立ちに、良く似合う淡い色の着物を着た女性だった。

影と言っても微かに日が漏れていて温かい、眠るのに都合の良い場所だった。

季節は日本の四季で言うところの春だろう、草原の草にも巨木にも強さと優しさを感じられた。

時間は正午過ぎだろうか、まだ太陽は高く眩しい。

そんな中、彼女は眠っていた、一日の中で最も明るく生氣に溢れた時を横になって過ごしていた。

しかしその事に、彼女としては何の理由も持ち合わせてはいなかった、何の理由も無くここに横たわっているのだ。

……また風が吹いた。

草原を波打たせ、巨木の葉をざわめかせ、彼女の頬優しくを撫でた。

……どうやら彼女が、目を覚ます様だ。

序章【木漏れ日】（後書き）

こんな稚拙なモノを読んで戴き至極嬉しいです。本当にありがとうございます。まだ続きますので、良ければお付き合い下さい。当たり前ですが……。

第一章【問い、そして謎】（前書き）

謎。謎ですね。漸くです。

第一章【問い、そして謎】

第一章【問い、そして謎】

『王都にて・1』

酷く慌てた人の足音と声、強くドアを叩く音、自分を呼ぶ誰か。そして暗闇。

ぼんやりとした意識のなかで、時刻が朝ではない事を闇に知らされた、そんな目覚め。

彼、ランスセットはいつも起きる時刻よりも随分と早くに起こされた事を自覚し、眠い目を擦りながらベットを下りて自室の出入口であるドアへと向かった。

一步毎に霞のかかっていた意識もはつきりとしてくる。

そして三歩程で外からドアを強打している彼等が誰か、そして何と言っているかも漸く分かった。

「王都が襲撃された！」

「王都が焼き打ちされている！」

彼等は城下の民だと知れた。

「王様が危ない！」

「王妃が殺される！」

「姫様が掠われる！」

そして己を呼ぶ声。

「ランスセット騎士隊長殿！、この国の為、御出陣をッ！」

彼は直ぐさま近くの槍を手にして外の者達に問い掛ける。

「それは本当か！？」

大勢の声が幾重にも重なって返ってきたが、返事の意味は一つだった。

「間違いなく、今王都が燃えている！！」

彼は急いで着替え、手早く防具を身に着けると戸を開いた。

夜の闇を一瞬忘れさせてくれる程の松明の明かりがそこに広がっ

ていた。

「騎士隊長殿……。」

民の顔には不安が広がっていて、収まらぬざわつきが彼等を覆っている。

「心配するな……。」

騎士隊長と呼ばれた男はすぐ近くの馬小屋に目をやった、そしてすぐこの騒ぎですっかり目が覚めてしまった自分の馬のところに行き手綱を手に取り跨がった。

「ハッ！」

ランスセットの気合いと手綱の捌きに馬はいななき、馬小屋を飛び出した。

そして城下の民の前で止まりその視線を受けながら、はやる気持ちと自らの内に広がる不安を隠しながら優しく彼は言った。

「この国も、王も、妃も、姫も、お前達も、守り抜いて見せる。」

言葉を信用足るものへと変えるこれまでの実績と人柄、そう実力と信頼関係の両方が彼にはあった。

ざわめきは去り民は暫く沈黙したが、やがて誰かがぼつりと呟いた。

「お願いします……。」

彼等の願いと彼の願い、それが同じであることを互いに理解する。だから彼等はここにいるのだ、だから彼は今走り出すのだ。

そして王都へ、唯一人の騎士を乗せた馬が走り出した。

『時計塔の上で・1』

鐘が鳴っている。町中へ午後二時を伝える鐘が鳴り響いている。リーイン……ゴオオン……リーイン……ゴオオン。

二時だから二度、その鐘は高く重く鳴り響いた。

時の偉大さと絶対なる規則を訴える様だ、と彼は思った。

鐘がある時計塔のその屋根の上で、鐘の音をすぐ下に感じている白衣を着た男が一人居た。

もう三時間程もこうしているだろうか、とりあえず三度この鐘の音を聴いたし、何も食べていないので腹が空いてきた。

たいてい時計塔というのは多くの人が遠くからでも見える様、鐘の音が遮られず遠くまで届く様高く高く創られているものだ。勿論この時計塔も例外では無い。

そして彼はその塔の屋根の上にいる。

因みに梯子等を取り付けられておらず、人が自力で下に降りられる高さの造りでも無い、下の鐘迄でもかなりの距離があるだろう。

「……。」

沈黙するしかなかった。何度も大声で助けを呼んだりもしたのだが、しかしその声は鐘の音とは違い誰にも届かなかった。

無駄だとは思った。喉が渴くだけだ、むしろ愚かを悟った、無駄だと知りながらそれにすぎた自分に。

男は白衣を着ているもののあまり厚着ではない。今は日があるから暖かいが、やがて日が落ち夜が来れば寒くなるだろう。何しろ高い所だ、風当たりも強い。

そして何より食糧がここには一切無い。

白衣の男はこの状況を脱すべく思考を巡らせる。

靴を投げるといふのはどうだろうか？、しかしこの高さから靴なんて投げたら死人が出かねない、気付いてもらえたとしても降りたときには殺人犯になってしまつかも知れない、もしそうならなくとも怪我人が出る可能性は高い。

悩み所だ。自分が助かるために他人を犠牲にして良いものだろうか……。

良くはないだろうと、男は靴を投げるのを今はやめた、幸い今はまだ死の危機には直面していない、これは最後の手段として取っておこうと。

その後暫く考えて、そして彼ははっと気付いた、そしてすぐさま屋根の縁まで移動した。

『迷惑な二人・1』

男が街中で背に負っていた剣を片手で抜き、そしてそのまま片手で右上から左下へと振り抜いた。

そこには女が一人立っていた、はずだった。だが血飛沫は上がらなかったし、そもそも当たった手応えが男には無かった。

斬撃の外に女が立っていた。集約される事実、男の一撃がかわされたということ。

「……クソがッ、外したかッ。」

軽い苛立ち、男は眉間にシワを寄せながら剣を引き戻し右肩に担いだ。

その剣は握りから先端までの長さが男の身長と同じぐらいで、そのうえ肉厚、更に剣に半身が隠せるほど幅広の大剣だった。

「気に障ったかしら。」

女は十代後半だろうが、少し若さの残る顔立ちにそれを気高さで包む様に綺麗なブロンドの緩くウェーブのかかった長髪の上から黒く艶光りするテンガロンハットを被っていた。そして右目に黒い眼帯、同じ黒のコートに同じ黒のミニスカートを纏い、黒手袋に黒ブーツを着けていた。

そしてさも余裕と言わんばかりに右手でその黒ミニスカートの右裾を引っ張って会釈してみせた。

腰には細身のサーベルを吊っていたがそれを抜くことはしなかった。

男はそんな女目掛けて無言のまま再び剣を片手で振り抜こうとした。そのときだった。

「!?!」

何かが煌めき、男の目に太陽光を反射した。

そして事件は起こった、巨剣とそれを振るう者、その初手を避けられる者、そして反射した太陽光。

手元、と言うよりは体勢が狂るい太刀筋も同様に狂った。しかし確かな、いや想像より硬い手応えがあった。そして一度振った剣は

その重さと振り出した時に加えられた力によって本人の意志とは関係なくそのまま振り抜かれた。

斬ると言うよりは叩き割る、が正しい表現だろう。そして叩き割られたのは巨大な建物だった。

「なにも物に当たらなくても……。」

女は素っ気なくそういった。

「別にそんなじゃねえが……。」

巨大な剣に加えられた一撃によりは建物は大きくえぐれた、しかしそれはまだ終わっていないかった。

粉塵があがり亀裂が走り、止まり、また走る。

「駄目だなこりゃ、耐え切れねえ……。」

二人は感じた、突如緊急事態になったことを。

「正しく馬鹿力ね……。」

足元に転がった建物の破片を見ながら男は思った。さすが俺様、すげえ力だ……、と。

そして二人は同時に寒気に襲われ、脱兎の如く走り出した。

亀裂が何処まで入ったか分からないが、その威力は確実にその建物にとどめをさした。

巨体がゆっくりと傾き始める。

『兎の街・1』

この事態をどうにか出来る者、いわゆる英雄、それが今必要な者の名だった。

しかしその轟音を撒き散らしながら倒れようとしている建物から逃れようとするものは居ても、自らそれに向かっていくものは皆無だった。

群衆は大混乱を起こし、逃げ出し、そして……。

「時間が無いって言うのに……！」

跳ね回った。

それは兎の群衆だった。

白に黒、灰に茶の体毛、赤目に黒目に青目に茶色の目。ピンとした長耳に垂れた長耳、物をかじるのに適した前歯、そして様々な服やら帽子やらと装飾品。

人の街に兎が溢れているのでは無い、兎の街だから兎が溢れているのだ。

そんななか、遂に一匹の兎が建物に向き直った。この事態を納める為に奮い立ったのだ。

茶色、と言うよりは赤銅に近い毛色をした黒目の兎だった。見れば黒い甲冑を着け手にランスを持っている。

そしてその兎は唯一匹建物に向かい跳ねた。その跳躍と言えばその辺りで逃げ惑う兎の跳ねとは全く違っていた、目的も意思も確立された上での跳躍だった。

その兎は名をセキトといった。

セキトは一直線に倒れていく建物に高速で接近、ランスを構えてそのまま跳躍の力を使い突き刺さった。

ランスの貫通力は凄まじく、そのままでは自身も建物の中に埋もれてしまったためセキトは途中で手を放した。

「！。」

その時の事だった、彼の黒い瞳が建物の屋根の方で人影を捕らえた。

疑問は浮かぶ、どうして人がいるのか？、何をしていたのか？、どうやって登ったのか？。

だがしかし、そんな事はどうでも良いのだ、セキトは建物を蹴り更に跳躍してその人影のもとへと向かった。

空を跳ぶ数秒の時間経過、耳が受ける風圧、音の聞こえない世界を渡って、彼は大きな鐘を横目にそこへたどり着いた。

大きく傾いてはいるがこの建物の屋根だ、そしてそこには確かに人が居た、だが……そこには人以外のモノも居たのだ、勿論兎などでは無い。

しかし見れば両者は睨み合っているのか、向かい合っていた。

刹那、人で無いモノが血を吐いて倒れた、どうやら死んだらしい。セキトは傾いた屋根に止まり、人に話し掛けた。

「大丈夫か！？」

だが返事は無かった、そして時間も無かった、それなのにそいつは倒れた、見れば白衣を着ている。

傾いた屋根の上で人が倒れれば、転がり落ちるのみ。

白衣を着た、どうやら男の人間が転がり始める、怪我等外傷は見られないがとにかくこのままにしてはおけない、恐らく放置すれば落ちて死ぬだろう。

人でないモノはもう転がり落ちていた、一瞬見たそれが何か言い表すには少しばかり頭の整理をしなくてはならない、よって今は一旦保留にすることをセキトは決めた。

そして白衣の男を掴み赤い兎は倒れ逝く建物から飛び立った。

その後、建物内部から青白い光が溢れ出て、爆音と共にその青白い光が建物を内から飲み込んだ。

「……。」

セキトは横目に倒れる建物を見ながら別の近くの建物を蹴り下に向かう。

倒れて沢山の命を道連れにするはずだった建物は、轟音と光によって消失させられた。

辺りに光から逃れた小さな破片がパラパラと音をたてて降り注いだ。それに紛れながらセキトは地に降り立つと、男を地に横たえた。「大丈夫か？。」

セキトの問いかけに男は応えない、やはり気を失っている様だった。

建物の残った根元の方にほのかに青白く輝くランスが落ちてきて突き刺さった。

じきに静まるだろうが辺りはまだ騒がしい、セキトはそんな中暫く男に呼びかけていた。

しかし息は有るが返事は無い、それが今の全てだった。

『迷惑な二人・2』

時計塔の方から轟音が聞こえ青白い光が見えた、そして倒れるはずだった建物は消滅していた。

大剣を背に負った男はそれを離れた場所から見ていた、そして少しほっとして少し興味が湧いた。

何者が何をしたのか、何を使ったのか、何故そうしたのか。

全ては青白い光の中、何者かの影がちらつく。

（うさぎ、うさぎ、うさぎね……。）

一瞬の光、さながら青白い満月。

それを見て跳ねる者。

大剣を負った男はそんな事を考えながら、視線を音のした方から目の前の眼帯をした女に移した。

だが今はそんな事はどうでも良かった、問題なのはこの目の黒い眼帯をした女、そしてそいつが持っているところあるものだ。

眼帯の女は先程大剣を負った男がしていた様に、轟音と光りが放たれた方を向いていた。

「おい……。」

一度（本当は二度）斬りかかられた男が近くにいるというのに、女は男を見ようともしなかった。

二人は何となく同じ方向に逃げてきた訳だが、だからといって和解したわけでは無い。

「ねえ……。」

女はそのまま、ぼんやりとした声で男に話しかけた。

「何だよ。」

無駄に律義に男は応えた。

「何が起こったの？」

あれだけの物を消し去るだけの謎の力、それに疑問を抱くのはごく自然な事だ。

そしてその問いかけの答えはむしろ男の方が知りたい事だった。

しかし今それについて女とあれこれ語り合う気は無い、ただ憮然として一言だけ返す。「知るか。」

女が片目だけ動かし視線だけを男に向ける。

「なにをそんなに怖がっているの?。」

片目が嫌に不気味に見えた、遠近感覚の取りづらそうなその瞳に全てを見透かされている様にさえ思えた。

声が震えぬ様に、気を強く持つて話す。

「何を言つてやがる……。」

心の波を悟られぬ様に、あえて抑揚無く話す。

「どうでも良いからあれを渡しやがれ。」

隻眼がただこちらを眺めていた、男はその目を凝視する。

「どうしてそんなに大事なの?。」

その理由は……?。

それを語る義理が無いことに気付き、男は剣に右手をかけた。

「わからないの?、それとも答えたくないの?。」

剣を握り、振る。

「知るか!。」

以前避けたその刃の威力を目の当たりにしていながら、女は避けようとしなかった。

振り出された剣が、振り出すのに必要な力以上の力によって止められる。

「何が怖いのか、何に怯えているのか、自分がどうすれば良いのか、わからないのね……。」

その隻眼の目前で剣は静止した。

「可哀相な人。」

全身を覆う寒気、縛り付けられたような感覚、まるで無力な自分。

「だからといって……。」

女は右手でその剣に触れる。

「これを返すつもりはないわ。」

女は左手で自分の懷からペンダントを取り出して見せた。

美しい青い石の付いた、首飾り、それが女が男から取り上げたあ
るものだった。

「……！」

声は出なかった、大切な物を返してほしいという渴望に飲み込ま
れていた。

しかしこの剣をどうしたら良いのか男にはわからなかった、押し
付ける事は出来ない、かといって戻す事も出来ない。

いつのまにか男の頭の中からこの女を斬るという選択肢が消えて
いた、しかし不思議なものでだからといってこの女に剣を向けてい
ないとそれはそれで危険な気がしていた。

女は剣から手を離し、そのまま首飾りを着けてみせた。

「だってこれは私の物だもの。」その言葉は嘘だと分かっていた、
しかし何故か反論する気は起きなかった。

何故か斬ってはいけない気がした、そんなはずはないのに、この
女がとても大切な人の様に感じられた。

男はついに剣を収めた。

『兎の街・2』

時計塔は根元と青白い光に飲み込まれ損ねたかけらだけを残して
消失していた、幸い辺りに重傷者はいない、僅かに降り注いだかけ
らによって軽傷を負った者がちらほら見受けられるだけだ。

兎達の騒がしさも徐々に静まりつつある、時計塔の倒壊に対する
驚きと恐怖が過ぎ去り、救いを受けた事に騒ぎ、時計塔が無くなっ
た事に慌て、やがて収まる。

時間がわからなくなるわけでも無い。

兎達は必ずと言っていいほど懐中時計を持っているから、時間を
違える事は少ない。

しかし失われて良いものでは無かったのだ、それは街のシンボル
であり兎達の大事なモニュメントだった。

それが今はもう無い。

兎達は探し始める、それぞれに気にかかった事を口にする。

大剣を背に負った男と、右目に眼帯をした女の話が出るのにそれほど時間はかからなかった。

ある者は捕えよと言った、ある者は見つけたら逃げよと言った、そうして騒ぎになる。

やがて街にある一団が現れた、それは黒鉄の鎧を身に纏い黒鉄のランスを手にした兎達だった。

「やれやれ、騒がしいな。」

隊の先頭をとる兎がそういいながら眉をしかめると、後ろの兎がそれをなだめる。

「仕方ないですよ、時計塔がこんな事になってるんですから。」

そういいながらその兎は自分の懐中時計を眺める。

「しかしまあ良かったですね、これだけの事がありながら重傷者はいないみたいですから。」

先頭をとる兎は灰の毛に額に一文字の向傷があった。

「ああ、大体どうなってるのかはわかる、そういうことだろ。」

後ろの兎は茶色の毛に他の兎に比べると毛足が長い、そして少し若く感じられる。

「感服ですね。」

彼は時計をしまい辺りを見回す。

「で、どちらにいらっしゃるんでしょうね?。」

どうやら誰かを探しているらしい。

もう一方はぶっきらぼうに応える。

「さあな。」

そして後ろの隊を見る。

「しょうがない、とりあえず各員に被害状況の確認をさせとけ。」
当然の事なのでさして驚きもせず、応える。

「はい。」

「あと原因の追求忘れるなよ。」 これも当然なので淡々と応える、そして相手の出方を伺う。

「了解です。でそちらはどうされるんですか?。」

自分の意志ではなく仕方なくといった様子で一文字の兎は応えた。
「あの馬鹿を探してくる。」

『蝉の声・1』

夕暮れだった、蝉の声が聞こえていて、やがては夜が訪れて他の虫達が騒ぎ出すその少し前。

季節は夏の真ん中で、昼の暑さが引き始める時間。

他の声は無い、ただ蝉が鳴いているばかりで一日の終わりが寂しく感じられる。

その日の沈む縁側に、一人の女性が座り込んでいた。

淡い色の着物を着た、長い黒髪の女性だった。

歳は十六辺りだろうか、女性は女性だがどちらかといえば少女と
いった未成熟な感じがする。

「日苗……。」

彼女が沈み行く太陽を眺めていると、後ろから声をかけるもの
がいた、それは彼女の父親だった。声のトーンから、父が何を言わ
んとしているのか彼女にはわかった。

彼女は振り向き、夕日に照らされたその顔を見た。

普段の優しい父ではない、厳しい師の姿がそこにあった。

「仕事だ……。」

彼女は沈む夕日に視線を戻し、ぼんやりとしながら応えた。

「はい……。」

蝉の声が聞こえなくなる夜が来れば、大体彼女の仕事の時間が始
まる。

仕事は嫌いでは無い、やらなければ食べていくことに支障をきた
してしまう。日々の糧を得るために必要な事だ。

しかし自分がその行為を決して好きではないことを彼女は自覚し
ていた。

やめる理由があればあるいはやめられるかもしれない、しかし今

の所それは無い、むしろ必然性ばかりが目立つ。

「場所と相手は追って伝える……。」

父はそう言うのと静かに何処かに立ち去った。

彼女は時が来るまでそのまま夕日を眺めていた、そうして平穏な世界が終わりを迎える。

『この世界における崩壊と生存の関係性・1』

痛み、傷み、悼み。

悲しみ、哀しみ、カナシミ。

好、抗、攻、考。

全部が欲しいのです。

何も、か、も、全てが、続べられたモノが物が、者が、欲しいのです。

痛みも、喜びも、哀しみも、その全てを手にしてみたいのです。

だけでもどうすればそれは叶うのでしょうか、敵わないのでしょうか？、適えられるのでしょうか？。

わかりません、分かつことが出来ません、解せません、判る訳がありません。

少しお腹が空きました。

みなさんはどうでしょうか？、しかし関係ありません、あなたは私ではないからです、私は私でしかないからです。

私は全てを手に入れる事を諦めます。

そして私は独裁者は嫌いです、涙を流すものも嫌いです、動くものすら嫌いです、動かないものはもつと嫌いです。

そうです、これこそ全て、これこそ壺、これこそ零。

私は……。

『孤独・1』

これは夢だと思う。

それかそう、何かのテーマパークに迷い込んだ、そういうことだ

と思う。

兎が目の前を、歩いている、のだ。

ただの高校二年生である中畑栄登は一日の授業を終えて帰宅する所だった。

そこまでの記憶はある、けれどもそこからの記憶が全くない、気がついたら兎が目の前を歩いていたのだ。

それも服を着ている。

時たま懐中時計で時間を確認したりする。

知り合いに出会えば軽く会釈する。

辺りを見回すが……、人間は見当たらない。

そうなつてくるとまた話は難しくなる。

客がいないテーマパークは有り得ない、いや全然流行ってないと考えることは出来ないだろうか？……これほどの兎のクオリティ……、それは有り得ない。

自分の知らないうちに近所にオープンしたウサギーランドに何故かいきなり拉致られた説が悲しげな音をたて崩れ始める。

さて……まだオープンしてないんじゃないだろうか？。

それなら客がいなくとも納得できるが、しかしなぜ拉致られたのか……テストーというわけだろうか？、だが一人だけというのはおかしい大体なぜ自分なのか分からない、なんにしても謎は消えない。

まるで不思議の國の様だな……と栄登は思ったが、兎を追いかけた記憶も穴に入った記憶も無い。

夢……だろうか？。

誰かに尋ねたいが、夢ならその意味すらない、夢じゃないとしてもその意味がない、おかしい人間扱いされるのがオチだ。

……、暫く栄登はぼーつとしていたが、やがてあることに気付いた、兎達は栄登の事を見ていないのだ。

これはもしかしてこちらからはあちらが見れるが、あちらからはこちらが見えないということだろうか？。

もしかしたら全てが実体の無いホログラムか何かかもしれない。
ウサギーランド説、再浮上。

事件が起こったのは栄登が、国を上げて創られた（想像）近未来的兎レジャースポット「ウサギーランド」^{かわいい}に想いを馳せているその時だった。

「そんな所でばーつとして、どうかされたんですか？。」
話し掛けられてしまった。

NPCに違いない。

そうであって欲しい。

「顔色が優れない様ですが、大丈夫ですか？。」
顔色が優れない原因にそう言われているのだから世話が無い。

「おっと失礼、私はワグナー、こうみえて医者です。」
兎のくせに、医者だと！？、それはつまり獣医さんという意味なのだろうか？。

見れば確かに良い身なりをしている、お金には困ってなさそうだ。
まあ、勿論金銭という概念が兎達にあればだが。

「い、いえ、お気遣い無く、少し物思いにふけていただけですの
で。」

ええちよつとウサギーランドとかについて。

「そうですか。」

どうやら自称医者のワグナー（性別は多分雄）は納得したらしかった。

「若いうちは誰しも思考と現実の間をさ迷うもの、しかし行動してみなければ答えが出ない事もあるのです。」

つまりあまり考え過ぎるのも良くないと言いたいのだろう。

「はあ、そうですか。」

つまりどうしろと？。

栄登は曖昧な返事をしながら疲れた。

「若いうちは失敗してもやり直しがききますからなあ、命があれば
ですが。」

急に不穏な発言をする。

兎が言うので余計に怖い。

「……………」

もうなんだか疲れがどつと来たというか、思考の限界というか、何が何だか……………」

「……………」

そして沈黙。

「まあ、大丈夫なら良いのですよ、では。」

そう言つとドクターワグナーは栄登の前から歩き去つた。

あくまで、歩き、去つた。

大丈夫……………なのだろうか？。

自分自身大丈夫だとは思わないが、大丈夫ではないわけでも無い。とりあえず生きているのだし、兎と話することが出来る事もわかつた。

問題は何故自分がここにいいのか、存在理由そのものだ。

しかしあちからもちちらが見える事がわかつた以上、ずっと立ち止まっていると不審に思われてしまう、栄登は宛も無く歩き始めた。

暫く歩くと、遠くですごい音がしてその後何かが光った様に見えた。

なんとなく、そちらに歩き始める。

『兎の街・3』

兎の国王立自衛隊黒鉄の耳。

それが彼等の所属する組織の名前だつた。

「くろがねのミミだあー。」

子兎がその姿に無邪気にはしゃぐ。

「なあ、お前……………」

その子兎に額に一文字の傷を持った兎が話し掛けた。

あ、と声を揚げ、子兎がその場で跳ねる。

「鉄壁の一字だ!!。」

鉄壁の一字とはこの灰色に額の一字傷を持つ兎の通り名である。

喜ぶ子兎を冷静に見ながら一字は尋ねる。

「この辺で赤い兎を見なかったか?。」

子兎は楽しげに、鉄壁の一字の周りを跳ね回り。

「紅の翼!?。」

と、さらに興奮した様子で聞き返した。

「ああ、そいつだ。」

素っ気なく返すが、子兎は気にした様子も無く。

「紅の翼が助けてくれたの!?。」

と喜び跳ねる。

どうやら見てはいないらしかった。「ああ、だが感謝はしなくてもいいぞ、仕事だから。」

そう言つと鉄壁の一字は子兎から離れた。

「がんばってね!!。」

情報は得られなかったが子兎は喜んだ、力いっぱい手を振り笑顔で応援してくれた、それが彼には嬉しかった。

「しかし、あの馬鹿は……。」

そうばやくのもつかの間、一字はそのランスを抱えたまま跳躍、近くの建物の上に至る。

感じたのは恐ろしい殺気、その場の誰でも無い間違いなく自分に向けられた殺気。

（どこのどいつか知らんがここでやり合う気なのか!?。）

一瞬でその目的を探索から戦闘へと切り替える。

そうしなければ生き残る事すら難しいと、それをすんなりと受け入れられる程にその殺気は鋭かった。

（どちらにしてもこいつは……。）

じりじりと感じる姿無き者からの威圧感が、強敵との戦いを予感させる。

時間の感覚が曖昧になる。

鼓動は速く、しかしそれを氣遣う余裕は無い。
瞳がその姿を休み無く探し続ける。

「どうした……、出てこないつもりか……。」

そんな訳が無い、必ず出てくる、必ず火花が散る。

むしろその眩きは望みに近い、出来れば戦いを避けたい本能がそれを願っているのだ。

しかし逃げ出したら逃げきれぬのかと問われればそれは謎だったし、なにより彼はそれをしたくなかった。

彼はそういうタイプの兎だった。

そして……。

「！。」

ランスを横に一閃。

響き渡る金属同士の衝突音、手に伝わる衝撃。

ランスの振り出し方向とは逆方向に直ぐさま踏み切り距離を取る。
すかさず目視、敵を確認する。

「イナバ……。」

そこには赤い目の白い兎が佇んでいた。手にはランスではなくもつと軽い細身の武器、サリッサが握られている。

それが速さの理由だった。

「久しいな、イチ。」

イナバと呼ばれた白兎は一文字にそう話し掛けた。

「何やってんだよイナバ……、てめえ……。」

ランスを構え跳躍、一直線にイナバに突撃する。

「進歩がないな、イチ。」

直線的な攻撃ラインを基本に忠実に横の動きで避ける訳だが、イナバはイチのその攻撃ライン、移動ラインにサリッサを合わせて手の握りを緩める。

こうしておかないとぶつかった時の衝撃で細身のサリッサと自身の手首がやられる為だ。

いわばイチの攻撃範囲を避けながらイナバがカウンターを出したような状態になった。

「くツツ!?!」

イチはそれを頭を動かすれすれで避ける。高速の中銀色に美しく揺らめくサリツサが見えた。

イチはランスを足元に擦らせ跳躍の勢いを若干殺すと足を付けて再び跳躍、今度はイナバを直接狙わずイナバの頭上に向かう。

「今まで!。」

そのまま重力に任せて落下する。

イナバはそれを軽やかに低く跳躍して避けようとする、そこでイチはランスをその方向へ投擲した。

「何処行つてやがった!?!。」

イナバは足を地に付けて再び低く跳躍、天より迫るランスをかわす。

「さあなツ!。」

ランスが降り突き刺さる。

「てめえ……あの時、俺達が……。」

ランスより少し離れた場所に着地するとランスに歩み寄り、
「俺達が、どれだけ心配したと思ってやがるツ!。」

それを右手で引き抜く。

「……。」

イナバはそのサリツサを脇に抱えたまま、視線をイチから外した。

「おい!、何とか言え!。」

思わずイチは声をあげた。

「……………嘘つき。」

反対にイナバのトーンは暗く低くなった。

「はあ!?!、てめえ何言つてやがる!?!。」

イナバの声は小さくなって、聞き取るのも難しかった。

「……………あの時……………」

それは呟きにと変わる。

「おい、ホントに聞こえんぞ……。」
苛ついていたイチが急に冷静になる。

「……あの時……あの時……あ……時……の時……あの……時……
……。」

そして言葉の発音が無くなっていく……。

『孤独・2』

建物がなんだか壊されていた、しかしどんな建物だったか知らないし、どうして壊されたのかその理由もわからない。

というか、壊されたと言うより、失くなっていると言う方があっている気がする。

建物の途中が殴られたのか何なのか砕けていて、そこから上が無いのだ。

「これは多分……。」

兎的バビロニア風建造物オブジェ、タイトルは「戦後に残ったモノ」で、戦争の悲しさ虚しさを伝えながらも、これからの未来に向けて、かつての塔にかける熱い思いを忘れないための作品、ウサギランドに来るお客はここで記念撮影をする。しかし壊れ具合がやけに新しい気もする。

「……という感じのモニュメントだろう。」

彼はウサギランドをまだ諦めていなかった。

しかしながらこの兎達は、一体どうなっているのだろう。

人が入った着ぐるみだとは考えにくい、耳やら鼻やら作りが良すぎるし、跳ねたりするのが問題だ。

ロボット、つまり機械の兎だと考えるのが恐らくは一般的だ。

訓練された兎、とも考えられはないのだが、言葉を話す以上考えにくい。

あるいは、兎では無い。

兎の姿をした何か……。

いやまてよ、兎だ、今まで人類には秘密にしていた100%の力

を開放した状態の、いうなれば真の兎、真兎だ。

……。

彼は思った、自分は何を考えているのだろうか……と。

そしてこうも思った、もう兎なんてどうでも良いじゃないかと。

ここが何処なのか、どうしてこんな事になったのか、これからどうするのか、そっちの方が問題だった。

「はー。」

彼はこの状況に脱力してしまう。

「あー。」

何だかやる気も起きない。

「うー。」

唸ったところでどうにもならない。

「ー……。」

暫く黙り、遠くを眺める。

はっと、気がつく。

「ちよつとそこの君?。」

周りに黒い鎧を着た、兎達が集まっているのだ。

「は、はい。」

彼は少し動揺しながら応えた。

「……。」

周りの兎達がざわざわと相談しだす。

「確かに人間の男だが……。」

「剣が無いな。」

「確かに……。」

「剣が無い。」

「剣が無くては別人の可能性が高いぞ。」

「ふーむ。」

「それに少し若くないか?。」

「そうか?」

「知らん。」

「人間で剣を持っている、それが犯人の特長だ。」

「剣が無いな。」

「髪の色は？、誰か聞いてないか？。」

「確か赤毛だそうだが。」

「こいつは黒いぞ。」

「じゃあ別人か？。」

「いやしかし、三つの特長の内一つに該当するなら、三十三%は犯人の可能性があると考えられるんじゃないか？。」

「どうやら人間の男、というだけで犯人扱いされているようだ。」

「まあまあ。」

その輪に一羽の、毛足の長い茶色の毛をした兎が入ってきた。

「逆に言えば確証が無いわけでしょう？。」

諭すような口調だった。

「！、テキロさん。」

テキロと呼ばれた兎は少し若い感じがしたものの、何処か他の兎とは違う雰囲気があった。

「けど人間ですよ。」

「そうですよ、人間ですよ。」

テキロと呼ばれた兎は栄登を横目に見ながら言う。

「確かに、人間ですね」

「でしょう？。」

他の兎が同意を求める、がテキロは意にかいさない。

「でもそれだけですな？。」

兎達は静かになって、みんなの視線がテキロ一羽に集まる。

「人間だけど、巨大な剣を負ってませんね、髪の色も違うし、大体逃げたはずの犯人が何しに戻っているんですか？、しかもこの自衛隊の中に？。」

確かに、確かに、そう呟きが漏れる。

「まあ状況を知りたくて一人で戻ってきたと考えられなくもないですが、特長が一致していなさ過ぎますよ。」

そしてとどめの一言。

「人間の男性全員が全員を捕まえる気ですか?。」

兎達は皆で互いに目を合わせて、困惑した。

やがて一羽がテキロに問う

「では彼はどうしたら?。」

テキロはもう栄登を見てはいなかった、何処か遠くを眺めていた。
「解放、してあげて下さい。」

『秘密結社・1』

「時間が無い……、時は迫っている。」

カチコチ……カチコチ……。

カーテンに遮られ直射日光の入らない暗い室内に柱時計の音がしていた。

そこに数個の影があった。

「確かに時間が無い……、奴らはもうやってきた。」
対話の時。

「しかしまだ終わっては無い。」

「そう、時間が無いが、終わりでは無い。」

「そう、まだ時間が残っている。」

「しかし、僅かだ、僅かに残る時が我々の味方であり敵だ。」

「だからやらねばならない。」

「そうだ……。」

それぞれがばらばらに腰をあげる、どうやら座っていたらしい。
影が伸びる。

「今、我々の時間が再び動き出すのだ……。」

部屋には立ち上る覚悟と、柱時計の音が満ちた。

一同が声を揃え、渴望の時に震える。

「そうだ……。」

『姫・1』

空は青、地に若草、花は咲き、日は高く、風が心地良い。
普通なら風が心地良いのだ。

とある列の中、彼女は揺れる馬車の中でぼんやりとその空を見ていた。

「……。」

彼女は風など気にもせず、ただ空を眺めていた。

「……。」

車内には彼女の他に保護者である男が一人いるだけで、他には誰もいない、静かな時が流れるだけだった。

「……ああ、退屈だな。」

沈黙を破ったのは保護者だった。

「……。」

しかしその言葉を見無視したのかはたまた聞こえなかったのか、彼女の視線は空に奪われたままだった。

「聞いているんですか？、姫。」

姫と呼ばれて、彼女は漸く自らの保護者に視線を移した。

「聞いている。」

そしてまた空を見る。

「退屈だと言われてもどうしようもない、空でも見てろ。」

一応案を出してはいるもののその姫の物言いは素っ気なかった。

「そんなものを見て何が楽しいんですか？。」

酷く適当にそう言いながらも保護者は一応空を眺めた。

「別に楽しいことは無いが、気晴らしにはなるだろう？。」

これからの事を考えると、という言葉がそこには隠されていた。

「そうですね？、むしろ俺は今退屈で後が楽しみな方なんですけど、不謹慎ですかね？。」

その隠された言葉を見つけ出せた者の応えだった。

「ああ不謹慎極まりない、空でも見て心を入れ換えろ。」

そうですね、と呟きながら、保護者はそれでも楽しみにしているのだらうひそやかに笑んだ。

「せっかくおおつぴらにやり合えるっていうのになあ……。」

保護者は黒髪、洋服は黒の上等そうなスーツを着ていた。

腰には二本のサーベルが挿してある。

一方姫と呼ばれた方は頭に銀のティアラを付け、とてもきらびやかで繊細な装飾が施されたまるで妖精の様な、しかし灰色のドレスを着ていた。

見る限り、武器は携帯していない。

「おい、ヘンゼル……。」

黒いスーツを着た保護者に姫はそう呼びかけた、どうやらヘンゼルという名前らしい。

「何です姫?。」

気付けば姫はもう空を見てはいなかった、窓から頭を出し進行方向を見つめている。

「いや、それは私が聞きたい。」

ヘンゼルは同じ様に進行方向を覗き込んだ。

見れば馬車のずっと前、列の最前線で何やら兵が集まっている。

やがて馬車がその動きを止めた。

「何ですかね……、不審者……ですかね?。」

騒がしく兵が何かを言っているが、その内容は遠くて聞き取れない、しかしどうやら誰かに話かけているらしかった。

「わからん……、だが馬車が進まないと困る。」

ヘンゼルはやれやれと溜息をついた。

「いざとなればやりますが、グレートルがない以上迂闊には動けません。」

「そんな事は分かっている。」

姫はうざったそうに外を見るのをやめて、車内に座り直した。

「全く……、どうして後僅かな平和を労れないのか……。」

「浮足立つのは仕方ないんじゃないですか、少しでも誰よりも早く動きたいんでしょう。」

ヘンゼルはそのまま外を眺め続けていた。

お姫様は再びぼんやりと空を見ていた。

「みんな必死だな……。」

そしてさも自分は関係ない風に呆れてそう言った。

「姫、それは当たり前、それにうちもおなじ事でしょう。」

ヘンゼルは苦笑しながら姫をたしなめる。

「まあそうだがな……。」

流れ行く雲が羨ましい、そう思った。

第一章【問い、そして謎】（後書き）

読んで戴き誠にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6316d/>

Wanderung 7

2010年10月10日06時52分発行